

〈戦前編〉

奢侈と貧困

（第2巻第4号，1916年，510-524頁）

河 上 肇*

【解題】河上肇の代表作『貧乏物語』は大阪朝日新聞での連載中に人気を博し単行本は大正時代を代表するベストセラーとなり，多くの人を経済問題，社会問題に開眼させた。一方でその結論「貧困を解決するための富者の自発的な奢侈の廃止」は社会主義者からの批判を浴び，河上はこれに応える形でマルクス主義の研究に進んでいった。本論文は『貧乏物語』の原型となったものであり，『貧乏物語』では様々な事例や人道主義的主張により分かりづらくなっている奢侈の廃止と貧困層の生活改善との関係が簡潔に示されている。さらに『貧乏物語』では示唆されるに留まっていた「経済組織の改造」が必要であるという主張が結論で明確に主張されており，河上の当時の思想および日本の経済思想の発展を考える上で重要な論文である。なお本論文は河上の1918年の単行本『社会問題管見』（弘文堂）に再録されている。

目 次

- 一、序言——問題の意義
- 二、需要は一国の生産力を支配す
- 三、社会問題は分配問題にあらずして生産問題なり
- 四、奢侈にして全廃さるれば貧困は根絶す
- 五、余論——経済組織の改造

一 序言——問題の意義

本論の主眼とする所は，奢侈が貧困の根本原因たることを明かにするに在る。最も余が茲に奢侈は貧困の根本原因なりと云うは，奢侈に耽る者は其人自身が墮て貧困に陥るを免れずと云う意味ではない。言うところは，富裕なる社会一部の人々が奢侈の消費を為すと言うことが，他の多数の人々をして其貧困状態を脱する能わざらしむる根本原因なりと言うに在る。

思うに巨万の富を擁する世の富豪翁にして，

例えば其愛嬢の衣装の為に千金を投ずる時，之に依りて己等が飢えたる貧兒の口より其食物を奪いつつありなど云うことは，彼らの全然夢想だもせぬ所で有ろう。恐く彼等も普通人と等く，又は普通人以上に人情に敦き善人にて，其愛嬢の衣装の為に千金を費すが如きは，自己の身分に応じ勿論当然のことにて，己等が斯かる事に金を使えばこそ始めて世間の商人や職人に仕事もあり儲けもありて，彼等は之に依って漸く其生計を支えつつあると云う位に想像して居るのが普通であろう。乍併，之は全く誤解である。而して此誤解の為に——経済学の初歩を学びたる者には，殆ど説明の必要さえ無かるべき，此誤解の為に，今日の如き文明の世の中に多数

* かわかみ はじめ（1879-1946）。1909年助教授，15年教授，経済原論・経済学史。1928年退職。

の人々は貧困に苦みつつある。学問上には滑稽とも見ゆる此誤解が、実際上には戦慄すべき悲劇を生じつつある。これ余が茲に此の自明の問題に筆を執らんとする所以である。

二 需要は一国の生産力を支配す

何が故に吾人は奢侈を以て貧困の根本原因なりと為す乎。何が故に吾人は富裕なる社会一部の人々の奢侈的消費を以て、他の多数の人々が其貧困状態を脱する能わざる根本原因なりと為す乎。之を明かにせんが為には、先ず今日の経済社会に於いて社会の生産力を支配する根本の力は何である乎を明かにする必要がある。

一言にして之を蔽えば、今日の経済社会に於て其生産力を左右する力を有する者は所謂需要である¹⁾。茲に需要とは購買力を伴える要求の謂である。而して今日の経済組織は、此の購買力を伴える要求のみ顧み、如何に痛切な要求と雖も、苟くも購買力を伴うものに非ざる限り、凡て之を無視して顧みざるを以て其特徴とする。

蓋し多少の専売官業を除くの外、一切貨物の生産は之を私人の営利事業に委任し置くことが、現代経済組織の原則である。故に今日の経済社会に於いて生産さるる所の貨物の種類及び分量は、之を生産し売却することに依りて最も多くの利潤を収め得らるる範囲のものに限らる。即ち世上には如何ほど痛切なる要求ありとも、其の要求にして購買力を伴わざる限り、換言すればその要求が資力ある人の要求に非ざる限り、縦い其要求に応じて貨物を生産すとも、相当の代償を出して之を購買する者なく、従つて之が生産者は充分の儲けを得能わざるが故に、其生産は差控えられることと為る。又或程度までは之を生産するも、一定の程度を超過す

る時は、其需要にして限りある以上、之が売価は自ら下落し、従うて生産者の利潤も亦減少せざるを得ざるが故に、或程度以上には之が生産を制限することと為る。此の如くにして、世上には如何ほど痛切なる要求ある貨物なりとも、其貨物の要求者が資力ある人に非ざる限り、是等の貨物は或程度以上に生産されざると同時に、他方に於いては如何に贅沢にして無益なる——且多くは有害なる貨物なりとも、資力ある人が之を要求する限り、之を生産すれば高く売れて儲けあることと為るが故に、此の如き貨物は如何ほどにても生産さることと為る。これ今日の社会に於いて、一方には多数の貧民が日々の糧にも不足を訴えつつある傍ら、他方には至る所の店頭は無数の奢侈贅沢品が人目を眩せんばかりに美々しく陳列されある所以である。

今日の経済組織にして維持せらるる限り又富の分配にして不平等なる限り、而して富者がその裕かなる資力を以て種々の奢侈贅沢品を需要する限り、一方には多数の貧民が日々の糧にも不足を訴えつつある傍ら、他方には至る所の店頭は無数の奢侈贅沢品が美々しく陳列されて居ると云う此の不可思議なる現象の跡を絶つべき見込は無い。是れ今日の社会に於いて「文明に対する失望」(the disappointments of civilization)の歎声ある所以で有ろう。

近頃我が国に起こりし問題にして、此点に関し最も能く現代経済組織の真相を説明せるものは、所謂米価調節の問題である。米は我国民の常食とする所で、我国民にとり最も太切なる生活の必需品である。されば米が豊富に生産され、其価格が低廉になると云うことは、吾々の生活にとって最も悦ばしきことで、現に政府は種々の方法に依りて頻りに米の生産増加を奨励しつつある。然るに所謂米価調節問題なるものは、如何にせば此米価をして或程度以上の高価を維持せしめ得るかと云うことの問題であつて、政府は此問題の解決の為に、或は少からぬ

1) See, Cannan, Wealth, (1914), Chapter VI, The Controlling Power of Demand.

資金を支出して米穀を買上げたり、或は全国より委員を招集して会議を催しなどしたのである。一方には米価高直なるが為に、人並みに日本米を常食とするを得ず、又纔に之を常食とせる者に在りても、月々の米代の支払には頭を悩ます者少からざる現在の日本に於て、他方には為政者や学者が米価の釣上げに苦心せねば為らぬと云うのであるから、事物を公平に考うる人より見れば、之は如何にも不思議の現象であると謂わねば為らぬ。吾々学問に従事する者は、斯かる不可思議の現象に対し之が応急の政策を講ずる以外、別に之が根本の解決に対して多少の思いを致さねば為るまい。

三 社会問題は分配問題にあらずして生産問題なり

今日の経済社会に於いては能く生産超過(over-production)と云うことが起る。米の供給が多くて其価格が下落し是が為に農業者が困ると云うが如きは、即ち所謂生産超過の一例である。乍併、茲に生産超過と謂うは、其生産額が世間の要求額以上に超過したと云う意味では無い。只之を一定の価格以上に売却せんが為にはその供給額が多きに過ぐると云うだけの意味である。此の如く、貨物の生産額が世間の要求額に達せざるに先ち、早くも所謂生産超過を惹起し、之が生産を制限せねば為らぬと云う所に、現代経済組織の欠陥がある。

何れにしても、今日の経済社会に於いては、貨物の生産額が世間の要求額に達せざる以前に於いて早くも生産制限を行うの必要あるが故に、生活必需品の生産額は実際に於いて甚しく不足して居るのである。健康の維持に必要なだけの衣食住を社会凡ての人々に向つて支給するが為には、今日の生産額では不十分なのである。此意味に於いて、今日の社会問題は、分配の問題でなくて生産の問題である²⁾。今日生産されつつある生活必需品を如何に都合好く分配

したりとて、最初から生産総額が不足して居るのであるから、其で問題の解決さる可き望みは無い。其よりも生活必需品そのものの生産を増加するの工夫を講ずることが先ず肝要なのである。

乍併、現代の経済社会に於いては、前既に述べし如く、縦い要求あるも必要な所には貨物の生産が行われぬからして、生活必需品の生産を増加すると云うことが実は極めて困難な事業である。蓋し凡ての教科書に説くが如く、貨物の消費に関しては所謂享樂遞減の法則なるものが行われて居る。嘗皆川淇園が「酒数献にいたれるときは味なく、肴数種におよぶときは美みなく、煙草数ふくに及ぶときは、にがみを生じ、茶数椀におよぶときは香ばしからず」と云ったのが即ちそれである。而して生活必需品に在っては、此法則の実現される度合が殊に急激である。是の故に、如何に富裕なる人々と雖も、其の生活必需品に対する需要には自ら限りあるもので、例えば如何に充分なる所得あればとて其所得を以て限りなく米を買うものでは無い。如何に富豪翁なればとて、其胃袋の大きさは左して貧民と違わねば、其食欲を充す為に需要する米の量には自ら限りがある。そこで其余裕の金銭をば、生活必需品以外のものを需要する為に消費することに為る。然るに今日の経済組織の下に於いては、需要なき貨物は顧みられざると同時に、需要さえあれば如何なる貨物にても生産されるのである。されば余裕ある人々にして、生活必需品は余り多く之を需要せず、却て種々の奢侈贅沢品に向つては限りなく之を需要せんとする限り、社会の生産力即ち資本と労力とは、大部分是等の奢侈贅沢品の生産のために吸収されて仕舞つて、他方生活必需品の生産は到底或度以上に拡張され能わざることと為るの

2) See, Chioza-Money, Riches and Poverty, (10 ed., 1910) and his Preface to Reason's Poverty (1909), p. VII.

である。

尤も如何に貧民なりとて、消費すべき貨幣を全く所持せざる者はなき故、彼等と雖も生活必需品に向つて全く需要を起し得ざる訳では無い。只問題は、彼等の需要の力が弱くて小さいが為に起る。即ち彼等は充分なる所得を有せざるが為に、如何に彼等の生活にとりて必要な物資と雖も、彼等は之に向つて或程度以上の代価を支払うことが出来ぬ。然るに他方には巨万の富を擁する者があって、其等の者が縦い彼等の生活にとっては実際上何等の益なき物と雖も、兎も角有るに任せて種種の奢侈贅沢品に向つて高価を支払うを辞せざるが故に、多数貧民の需要は競争上是等有力なる需要の為に圧倒され、社会の資本と労力の大部分は是等有利なる(事業家より見て有利なる)奢侈贅沢品の生産事業の為に注入されることに為るのである。

四 奢侈全廃さるれば貧困は根絶す可し

以上述ぶる所に依つて考へれば、今日生活必需品の生産が不足して、其価格が高く、従つて社会多数の人々が貧困状態に陥つて居るのは、社会多数の人々が貧乏で其需要力が弱小な為であると云うことが分る。即ち貧乏人の多いのは貧乏人の多い為であると云うことに帰着して仕舞うので、そうなれば問題は循環して元に還つたかの觀がある。併し實際の世相は即ち之に外ならぬ。而して吾等の任務は、此の因果の循環して一見すれば殆ど之を裁断するに由なき一連の鎖をば、其急所急所を捉えて因果の循環を停止せしむるに在る。今此意味に於いて、余は貧困問題の解決の為に二個の方策を立し得べしと信ずる。

其一は余裕ある階級の人々が其奢侈的消費を出来得べきだけ節減し、能うべくんば全く之を廃止することである³⁾。思うに従来学者の奢侈

を説く、其根本の概念に於いて甚だ吾人の意を得ざるものがある[。]蓋し従来の見解に従えば、奢侈的消費と然らざるものとの區別は各個人の所得の大小を以て標準としたものである。例えば巨万の富を擁する者が一襲の衣服に千金を費すが如きは、其身分地位より考へて適當の出費なるが故に、此の如きは彼等にとりては敢て奢侈的消費と謂うべきに非ざると同時に、人力車夫が晩酌に刺身を用うが如きは、其所得に比較して過分の出費なれば、彼等にとりては奢侈的消費と謂はざるを得ずと説明するが如くである。乍併、余が茲に奢侈費と云い必要費と云うは、此の如く各個人の所得をのみ標準とするものでは無い。余は人間としての理想的生活(a fair life as human beings)を営むが為——之を分析して云わば、其肉体的生活(bodily life)其精神的生活(mental life)及び其道德的生活(moral life)の向上發展を計るが為め、——更に之を言い換へれば各個人が其肉体(body)其頭腦(mind)及び其靈魂(spirit)の健康を維持し其發育を助長し、進んでは社会に向つて貢献するが為め必要な消費は、各個人の所得如何に係らず凡て之を必要的消費と認め、斯る目的に向つて必要ならざる消費は、凡て之を奢侈的消費と名けんとするものである。されば縦い百万長者にして一襲の衣服に千金を投ずるが如きは、其者の經濟にとっては何ら痛痒を感じざることなりとも、其消費にして其人の生活にとり真實有用ならざる限り、余は之を以て奢侈的消費と認め、又日々五十錢の所得さなき労働者が酒を飲み肉を食うが如きは、其者の經濟にとりて甚だ不釣合のことなりとも、斯かる消費が其人の健康を維持する等の目的の為真實必要な限り、余は之を以て必要的消費と認むる者である。

今定義の当否は姑く舍き、余が茲に余裕ある階級の人々の奢侈的消費を廃止せんことを希望すと云う場合の奢侈的消費とは、全く上述の如き意味を有するものである。蓋し普通に説明せ

3) See, Withers, Poverty and Waste, 1914.

らるるが如く、奢侈的消費と然らざるものとの区別を各個人の所得の大小を標準として定めんか、今日斯かる意味の奢侈的消費を為す者は、或は富者に少くして却て貧民に多きやも計られず。これ余が特に用語の意義を略説し置く次第である。

思うに余が謂うが如き意味の奢侈的消費をば、余裕ある階級の人々が凡て之を廃止することと為らんか、一方に於いては、此の如き不生産的消費の節減せらるる結果、新たに資本の増殖を来し、他方に於いては、奢侈品の生産廃止せらるる結果、従来此の如き貨物の生産の為に使用され居たる資本及び労力も亦た解放せられ、此の如くにして新たに増加され又は節用されたる社会の生産力は尽く生活必需品の生産の為に使用せらるることと為り、其結果、縦い無用無害の奢侈品は最早や生産されざるに至るも、有用なる生活必需品は極めて豊富且廉価に供給されることとなり、労働に対する需要の増加に本く労賃の騰貴と相俟って、下層貧民の生活は全く其面目を改め、始めて天下を挙げて其生を樂むを得るに至るであろう。

今日独逸が八方に敵を受け、戦争と云う恐るべき不生産的事業の為大半の生産力を奪われながら、多くの人の予想に反し、今日に至る迄能く其国民経済を維持し來りたる所以のものは、一に其国民が平生の奢侈的消費を中止したるが為である。平生無事の時、如何に国民の生産力が無用の方面に濫用されつつあるかは、此一例に徴しても之を悟り得らるる。

元來従前の学者が一切の欲望を是認し、欲望の増進を以て経済發達の動力と看做し、寧ろ之を歓迎するの傾向ありしは、偶々資本家的生産制の下に於いて企業家の採りつつある見地をば其のまま受入れしに過ぎぬものであって、そこに一大誤謬がある。若し吾等にして永く斯かる見地に立たんか、人の欲望は際限なきが故に、如何に生産事業は發達するも、人生の経済的解決は之を永久に期し難きことも為らん。此点に

於いてロッセルの見地は槩に群を抜く所あるが如くに思われる。氏は嘗て財を定義して *Güter nennen wir alles dasjenige, was zur mittelbaren oder unmittelbaren Befriedigung eines wahren menschlichen Bedürfnisses anerkannt brauchbar ist*⁴⁾ と述べた。而して此定義は妄りに倫理学を経済学に輸入し來りたるものなりとて多くの学者の非難する所なれども、余は此の「真実なる」人間の欲望と云う概念は、経済学の基礎概念として欠く可らざるものの一と信ずる。思うに斯かる真実なる人間の欲望の充足にのみ用いらるべき貨物の生産にして既に充分の程度に達する以上、其にて人生の目的を達する為の一手段たる経済の使命は終りを告ぐる。此意味に於いて、真実なる欲望の充足に用いらるべき必需品の生産の未だ甚しく欠乏せるに係らず、真実ならざる欲望の充足に用いらるる奢侈品の生産の為に其の大半の力を割きつつあるが如き現代の経済状態は、全く経済本来の使命を忘却したものである。

今余は経済本来の使命を完うせしめんが為に、余裕ある社会の人々がその奢侈的消費を全廃せんことを希望する者である。此点に於いて余は多数の勤儉貯蓄論者と其見地を異にすると信ずる。普通勤儉貯蓄を説く者は、殆ど富者を顧みずして専ら之を貧民に向って説けども、余を以て見れば、勤儉貯蓄は之を有産者に向って説くべく、之を無産者に向って説くべきものでは無い。余は又此点に於いて社会問題の論者の多くと多少其見地を異にすると信ずる。社会問題の論者の多くは、此問題の解決の為先ず労働者の自覚を必要とするに反し、余は以上述べたるが如き意味に於いて、富裕者の奢侈的消費を制限せんがため、寧ろ先ず彼らの自覚を希望する者である。

4) Roscher, System der Volkswirtschaft, I Band, 1888, S. 2.

五 余論——経済組織の改造

以上余は貧困問題の第一策として、余裕ある階級の人々が其奢侈的消費を全廃すべきことを掲げた。思うに此方策の実現の爲には、勿論国家の力をも必要とすれど、(奢侈品の消費に重税を課するの類を指す、生活必需品の課税又は専売に重きを置ける我国現時の政策に対しては、余は此点に於いて多大の遺憾を有す)、究極は之を各個人の抑制に俟つの外は無い。但し余裕ある人々に向つて其余裕を浪費せざれと希望するのであるから、事の実行は極めて困難で有ろう。而かも余の信ずる所に依れば、之が現代経済組織の下に於いて考え得らるべき社会問題解決の唯一の根本策である。されば若し此の第一策にして実行され得ずとならば、余の考え得る限りに於いては、現代の経済組織そのものを改造して、組織の上より、先ず生活の必需品に向つて社会の生産力を集中せしむるの策を講ずる外には、別に貧困絶滅の根本策はない。元來

今日の経済組織なるものは貨幣価値を以て凡ての価値を代表せしむるの仕組である。されば種々の貨物に対する世人の要求を比較するに當つても、多額の貨幣の提供するものを以て有力なる要求と看做し、先ず其要求を充す、以て原則として居る。故に今日の経済組織の下に於いては、既に繰り返えし説明せるが如く、富裕者が其奢侈的消費を節減せざる限り、生活必需品の生産は如何にしても不足せざるを得ざる關係に爲つて居る。故に富裕者にして飽くまで其奢侈的消費を節減することを欲せず、而かも国家は其の健全なる発達を希望するの趣旨より、飽くまで貧困を根絶するの必要ありとするに至らば、遂には国家の力に依りて現代の経済組織は漸次変更を加えらるるに至るを免れぬで有ろう。しかし是等の事に論及するは元と本論の趣旨とする所に非ざるが故に、既に論じて茲に至れる以上、余は之を以て本篇の終りとするで有ろう。